上条当麻in涼宮ハルヒの憂鬱

白銀の勇者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
上条当麻ｉｎ涼宮ハルヒの憂鬱

【Ｎコード】
Ｎ９６６７Ｚ

【作者名】
白銀の勇者

【あらすじ】
この小説はもしも上条当麻が涼宮ハルヒの憂鬱の世界に来てしまったという物語です。
作者の初めての小説ですが、温かい目で見ていただけると幸いです。

はじめに（前書き）

今回は設定と大まかな作品の説明です

はじめに

この小説は、
もしも上条当麻が涼宮ハルヒの憂鬱の世界に、ハルヒの力でやって来てしまったらという話です。

何故上条が異世界に来てしまったかは、上条の幻想殺しで、相殺しきれずハルヒの力に負けて、異世界に来てしまった。
という設定です。

ちなみに、上条がハルヒの世界に来た時期は、フィアンマを倒し海をさ迷っている途中です。

上条は、とあるの世界の記憶は無くなっています。

そして、上条の幻想殺しは健在ですか、上条は幻想殺しの事を全く知りません。

上条の立場は異世界人の設定です。

説明が長くなりましたが、本編をどうぞ。

はじめに（後書き）

次回より、本編スタートです。

第1話　キョンと上条の接触（前書き）

いきなり上条とキョンが接触します。
少し短いです。

第1話　キョンと上条の接触

～キョンｓｉｄｅ～

俺の名前は○○○○（本名）あだ名はキョンだ。

って、オイ！作者！何故本名を公開しない！？

くそ、いつか本名公開するからな！

俺は今、今年から入学する北高校に向かって歩いている。

しかし、なんでこんな山の上に学校があるんだよ。

ったく、朝からなんでこんな山を登らなくちゃいけないんだよ。

ま、何日か経ったら慣れるだろ。

～上条ｓｉｄｅ～

俺の名前は上条当麻。

そこらへんにいるいたって平凡な中学…いや、今日から高校生か。

まぁ、変わっている所っていったら人より不幸って所かな。

俺は今、今年入学する北高校に向かって歩いている。

しかし、なんなんだよこの坂は。

しかもかなり長いし…

まぁ、何日か経ったらなれるだろう。

ってなんだ？
空き缶？ってヤバい踏んでしまう。
なんでこんな入学当日に～　不幸だ～

～キョンｓｉｄｅ～

ん？なんだ？
いきなり前の人が視界から消えた？
空き缶で転んだのか。
素通りするのも後味悪いし、
「おい、あんた大丈夫か？」
「ん？　あぁ、大丈夫だ。」

～上条ｓｉｄｅ～

なんか知らない人に声かけられて返事したど、いい人みたいだな。
「今度から足元には気を付けろよ。」
「あぁ、そうするよ。」
「じゃあ、俺は先に行くからな。」
なんかあいつとは、気が合いそうだな。
今度会ったら声かけてみるか。

～キョンｓｉｄｅ～

なんかあいつとは気が合いそうな気がするな。

まあいい、早くクラスがどこか調べて席に座っていよう。

第1話　キョンと上条の接触（後書き）

次回は、ハルヒの登場。
まだ、ＳＯＳ団結成には時間がかかりそうです

第2話　ハルヒ登場（前書き）

ハルヒの登場です。

第2話　ハルヒ登場

～上条ｓｉｄｅ～

俺は、坂で盛大に転んだ後、クラス表を見た後、クラスに行き、席について、始業式の時間を待っていた。

そして、俺は坂で会ったあいつを発見したので話しかけてみることにした。

「あんた、朝に声かけてくれた人だろ？」

「ん？あ、お前は坂で転んでいた人か？」

「あぁ、俺は上条当麻だ今後とも、よろしく。」

～キョンｓｉｄｅ～

朝のあいつは上条って言うのか。

しかし、同じクラスだったとはな。

「俺は、○○○○（本名）だ。中学ではキョンって呼ばれていた。」

って、オイ！作者！また名前を伏せ字にするな！

「んじゃ、これからよろしくな。キョン」

あぁ、上条もキョンと呼ぶのか

その後俺らは、適当に駄弁って時間を潰していた。

なんか上条には、いろいろ、不幸な事が起きていたが……

その後、始業式の時間になったため、俺らは、始業式に行き、午前中に学校が終わったため俺は、家に帰った。

～上条ｓｉｄｅ～

俺は、家からでた後、朝の爽快感を満喫して……いるはずなのに、めちゃくちゃ不幸な状態だった……

家を出た瞬間、野良犬に追いかけられ、水を、まいていたおばちゃんの水にぶち当たり、落ちていた空き缶で転んで、頭を強く打って、只今絶賛悶絶中だった。

朝から不幸だ……

「上条、大丈夫か？」
「キ、キョンか……」
「なんだったら、手を貸すが。」
「だ、大丈夫だ。」

俺は、キョンにそういって結構ダメージが多いが立った。

「くっそ～　朝から不幸だな」
「なんか、噛みつかれた後とか、上半身水浸しだし。
一体どんな朝だったんだよ……」
「聞くか？」
「いや、いい　聞いたらこっちまでブルーな気持ちになりそうだ。」
「そうか」

～キョンｓｉｄｅ～

上条……お前、どんだけ不幸なんだよ……

やっぱり不幸体質なのか？あいつ……

そうこうしている内に、俺らは、学校についた。
その頃には、上条の上半身はなんとか乾いていた

そして、その後、上条と駄弁っていると担任が入ってきた。

「俺がこのクラスの担任の岡部だ。」

どうやら、その後、聞いたら、ハンドボールバカらしく、ハンドボール部に入ったら即レギュラーらしい。
ま、しったこっちゃねーや。

「えー　今からみんなに自己紹介をしてもらう。
　それじゃ、出席番号１番から」

そして、何人かが自己紹介をして、俺の番がやって来た。

ついでに言うと、上条は自分の自己紹介の時に放送のノイズで自己紹介がかき消されていたな。

そして、俺は適当に自己紹介して席に座った。

そして、俺はあいつと出会った

～上条ｓｉｄｅ～

まったく、なんだってんだ。
自己紹介中にノイズがはいるなんて。

不幸だ……

ん？キョンの自己紹介は普通だな。

そして、次の奴が立った。

そこで、俺はあいつと出会った

「東中学出身、涼宮ハルヒ。
この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら私の所まで来なさい。　以上」

ここ、笑うところか？

しかし、なんだ？
超能力者と異世界人ってのに何かつっかかるな
何て言うか、前から当たり前のように接していたような、小さいころから知っている感じっていうか……

気のせいだろう。
俺は、そんな人間は今まで見たこと無いしな。
気のせいだ。気のせい。

さて、今日の飯。
弁当箱の中、悲惨なことになってなきゃいいけど……

第2話　ハルヒ登場（後書き）

今年はこれで投稿終了です。
それでは、また来年。

第3話　上条、接触（前書き）

明けましておめでとうございます。
それでは、今年一発目の投稿です。

第3話　上条、接触

～上条ｓｉｄｅ～

俺の、弁当箱の中は、予想と全く同じ状況になっていた。
それもそうだ。
朝っぱらからいきなり全力疾走していたら、弁当箱の中も大変な事になるのは目に見えるさ。

そして、時間は飛ぶが、その翌日。

なんか今日は朝に何もなく普通に登校できた。

お？　今日はついてるか？

そして、教室に入るとキョンがもういたので、話しかけてみた。

「お～い。キョン　おはよ～」

～キョンｓｉｄｅ～

俺は、涼宮の衝撃的な自己紹介から、一晩あけて、次の日。

俺は、いつものように、登校して、教室に入った。

そして、俺は涼宮に話しかけてみることにした。

涼宮は普通にしてりゃあ、一美少女だからな。

少し変人だが、美人とお近づきになりたいと思い、血迷った俺を誰が攻めよう？

「おい、こないだのアレどこま「お～い。　キョン　おはよ～」んだ？」

ちょうどいいところで上条が来た。

「お、上条。　おはよ～　あと少し待っててくれ。」

少し上条に待ってもらって。

「改めて、こないだのアレどこまで本気だったんだ？」
「こないだのアレって？」
「いや、自己紹介の」
「あんた、宇宙人？」
「いや、違うが。」
「あんたは？」
「え？俺？」
「そう。あんた。」
「上条さんは、どこにでもいる、不幸な高校生ですよ。」
「あっそ。」
「えっと。」
「宇宙人じゃないなら、話かけないで」

～上条ｓｉｄｅ～

なんか、話ふられて答えたら即行で空気になったな、俺。

ん？ちょうど岡部が教室に入ってきたし席に座るか。

今日は弁当箱は大丈夫だぞ。
走ってないし。

しかし、キョンはなんで涼宮に話かけていたんだ？
もしかして、涼宮とお近づきになりたかったのか？

確かに、涼宮は美人だが、変人だし。

血迷ったということにするか。

あ、弁当家に忘れているじゃん。（「▽」；）、

不幸だ……

あ、そうだ財布。

ない。忘れた。昼飯抜きか。

不幸だ……

～キョンｓｉｄｅ～

昼休みになったし上条と昼飯食うか。

「お～い、上じ……」
「ん？キョンか。どうした？」

なんか、上条から不幸なオーラが、バンバンでているぞ

「上条、どうした。　なんかブルーなオーラがものすごくでているぞ。」
「あぁ、聞くか？」
察しはつくが聞いておこう。
「今回は聞こうか。」
”長いので割愛します。
　　By作者”
「上条……ドンマイ。」
「あぁ。で、なんだ？」
さすがに弁当を忘れた奴の前で
「弁当一緒に食おうと誘いに来た」
などとは言えない。
「いや、特に用事は。」
「そうか。」
くそ、空気が重い
ん？あいつは……
なんでこっちに近づいて来るんだ？
～上条ｓｉｄｅ～

皆が弁当食っている中で（パンの奴もいるが）何も食わないのは、厳しいな。

あと、キョン。

何も用事は無いとか言いながら弁当箱見えてるぞ。

誘いに来たんだろ？　弁当食うの。

不幸だ……

「ねえ、あんた。」

ん？女の人の声が。

しかもこの声、聞き覚えが。

「ん？なんだ……」

なんで涼宮が俺に話しかけているんだ？

「あんた、本当に不幸なのね。」

「あぁ、上条さんは昔からものすごく不幸ですよ。」

「あっそ。」

ここまで、話所で固まっていたキョンが

「そういえば、毎日髪型変えているのは、宇宙人対策か？」

「そうよ。それだけ？」

「あ、あぁ。」

そこまで、話した後涼宮は立ち去っていった。

しかし、腹がへった。

不幸だ……

〜？？？？ｓｉｄｅ〜

この世界にいるはずの無い人間が、涼宮ハルヒに接触した？

しかも、彼は幻想殺し？

この世界に、幻想殺しは存在していない。

一体何故？　何故この世界に幻想殺しが？

もう少し様子を見ながら、情報を収集する。

朝倉涼子に、幻想殺しも観察させる。

私は情報を情報していよう。

第3話　上条、接触（後書き）

今年一発目が投稿終了しました。
最後に出てきたのは、あのひとです。

それでは、今年も良い年になりますように。

今年も、よろしくお願いします。

第４話　長門登場（前書き）

長門の登場です。
少し、長いです。

第４話　長門登場

～キョンｓｉｄｅ～

次の日、俺が登校してくると、涼宮が長い髪をバッサリと切ってきた。

ついでに言うと明日からは、ＧＷだ。

まぁ、俺は明日からは、ＧＷということで少し、浮かれた気分で、席に座った。

あ、上条も驚いている。

今日は、顔に水がかかったみたいだな。

髪の毛から水滴が少し垂れている。

しかし、上条の不幸は、凄いな。

あいつ、運が良かったこと、今まで一度でもあったのか？

～上条ｓｉｄｅ～

俺は、明日からＧＷということで少し、浮かれぎみで学校に向かった。

今日は、弁当持ったし財布も持った。

ついでに言うと弁当は、俺が作っている。

親とは、別居中だしな。

弁当の中は、ほとんど、昨日作った夕飯の残りだな。

今日は、不幸な事が無い日がいいな。
とか思っていた矢先に顔面に水かぶったけど。
その後、教室に入ると涼宮が髪の毛をバッサリと切っていた。
イメチェンか？とか思っていたらホームルームが始まった。
しかし、まだ髪の毛が乾かない。
タオルもってこればよかった……
そして、暇な授業が終わり、昼休みに俺は、キョンとキョンの友達の国木田と近くにいた谷口というやつと昼飯を食っていた。

「お前ら、この前涼宮に話かけてたな。」
「あぁ、そうだが。」
「俺は、話しかけられた、話を振られたが正解だな。」
「ま、どっちでもいい。涼宮に気があるんだったらやめとけ。」
「何でだ？」
「あいつは、告白してきたやつと、ほとんど、付き合っているが、全員ふられている。あいつがつきあってから、別れるまでの最短記録は、俺が知っている限り五分だ。」
そんなことなら付き合わなければいいのに。

「そして、あいつの奇人っぷりは凄かったぞ。」
「どんな事があったんだ？」
「一番有名なのは、校庭の落書き事件。」
「あ、それ僕知ってるよ。確か新聞にでかでかとそんな記事があっ

たよね。」

俺は、知らなかったな。

「それの犯人が涼宮だって言うのか。」

「あぁ、何せ本人から名乗り出たんだからな。」

「そうなのか？」

「そうだ。その後、教師が総動員で問い詰めたらしいぜ。しまいには、校長室にまで呼ばれていた。」

なんて奴だったんだよ……あいつは。

そうこういている間に昼休みが終わり、席についた。

そして、そのまま何もなく、学校が終わり、家に帰った。

さて、明日からは、ＧＷだ。

目一杯遊ぶぞ～

～キョンｓｉｄｅ～

時は一気にＧＷ明けに飛ぶ。

俺は、学校に憂鬱な気分で、登校した。

連休明けって、なんか憂鬱になるよな。

学校につきＨＲが始まった。

そして、席替えをするらしく、委員長、朝倉涼子がくじを持って教

卓に立っている。

そして、席替えが終わり、俺は窓側の一番後ろから二番目という最高の場所を取ることができた。

上条は、俺の横だ。

そして、涼宮が不幸な事に俺の真後ろだった。

ま、そんなに気にすることでも無いだろう。

さて、一時間目か始まった。

昼休みまで暇だな。

～上条ｓｉｄｅ～

俺は、そこらへんで聞き付けた噂を涼宮に聞いてみた。

「そういえば、お前全ての部活に仮入部したんだってな。どうだ？面白い部活はあったか？」

「そうなのか？」

キョンも話に混ざってきた。

「面白い部活は無かったわ。」

「そうか。」

「ミステリ研究部っていう部活もあったけど全く面白くも難とも無かったわ。」

「そろそろ時間だなじゃ、また後で。」

「それじゃな。」

「あっそ。」

～キョンｓｉｄｅ～

二時間目、俺は眠気に負けてうとうとととしていた。

それを遮るかのように、俺の頭に衝撃がはしった。

って、痛！犯人はあいつしかいない。

「痛って～な何すんだ！」

「気づいたのよ！」

キラキラした目でおれにそういってきた

「なんにだよ！」

「無かったら作ればいいのよ！」

「何をだ！」

「部活をよ！」

「何故俺に言う！」

「手伝いなさいよ！」

「俺がかよ！」

そう言った後、上条に指を指し、

「あんたも！」

「へ？俺も？」

「そうよ！」

「あ～涼宮、今授業中だ後でにしよう。」

ついでに言うと今は英語の授業中だ。

新任の英語の先生も固まっていた。

そして、俺は、続きをどうぞと手で合図した。

その次の休み時間、
いきなりあいつは俺と上条のネクタイを引っ張り屋上の扉の前に連れてこられた。

「ゲホ、ゲホ。　なんだよ！」
「協力しなさい！」
「部活の事か？」
「そう！」
「部室はどうするんだ？」
「あたしが用意するわ。」

いきなりむちゃくちゃな事言ってきた。

「別にいいぞ。」
「おい、上条そんなこと言ってもいいのか？」
「別にいいだろ。協力するだけなら。」
「なら、決定！」
「おい、俺はいいとは「てりゃー！」」

ギャー、目「お前、この前涼宮に話かけてたな」するわよね？（怒）
」

と涼宮は、指を二本用意している。

また目付きをされたら辛い。

「く、分かったよ協力するよ。」

「なら決定！部室が用意出来たら呼ぶわ。」
とだけ言うと、涼宮は、走って行った。
～上条ｓｉｄｅ～
「キョン、大丈夫か？」
ついでに言うとキョンはまだ目をおさえていた。
「正直言って、かなり痛い。」
「目、見えるか？」
「かなり痛いがなんとか見える。」
「そうか。じゃあ教室に戻ろう。」
「あぁ。」
キョンは、三時間目中ずっと目をおさえていた。
涼宮は、授業をサボっていた。
後でノートを見せてあげよう。
さて、ノートをとるか。
～キョンｓｉｄｅ～
涼宮め、目突きのせいで痛すぎてずっと目をおさえていても痛いが目を開けるとかなり痛い。
くそ、ノートがとれない。
そうこうしている間に三時間目が終わった。

ようやく見えてきた。

すると、上条が近づいてきた。

「キョン、ずっと目をおさえていたからノートとれなかっただろ。使うか？」

そういって俺にノートを渡してきた

「お、サンキュ」

さて、上条のノートを写すとするか。

そして、時間が飛んで昼休みに入った。

さて、弁当を食うとするか。

なんて思っていた矢先、俺と上条はネクタイを引っ張られ、部室棟の文芸部の部室前まで連れていかれた

「ここが私達の部活の部室よ！」

「「って、ここ文芸部室だぞ！」」

「大丈夫よ文芸部の子にはちゃんと借りるっていっておいたし、許可ももらったわ。」

と、指を指した所には、一人の女子が座って本を読んでいた。

「あの、名前は？」

「長門有希。」

「えっと、長門さん？」
「呼び捨てでいい。」
「えっと、部室を使わせてもらっていいのか？」
「別にいい。」
「なんか分かんない部活に占領されるけどいいのか？」
「別にいい。」
「その内追い出されるかも知れんぞ？」
「ご自由に。」

心が広いな。この人。

「ま、そういうわけだから、放課後、この部室に集合。いいわね。」
「書類はどうするんだ？」
「後からどうにかするわ。」
「部員はどうするんだ？」
「後から集めるわ。じゃあ解散！」

あいつは本当に嵐みたいなやつだな。

これからどうなるんだ？
俺の高校生活。

第４話　長門登場（後書き）

次回は、朝比奈みくるの登場と、ＳＯＳ団の結成です。
今のところＳＯＳ団員は七人を予定しています。

第５話　朝比奈みくる登場、ＳＯＳ団結成（前書き）

やっとＳＯＳ団結成です。

第5話　朝比奈みくる登場、ＳＯＳ団結成

～上条ｓｉｄｅ～
俺は放課後、谷口と国木田に一緒に帰ろうと誘われたが、涼宮に文芸部室に呼ばれているため、断り文芸部室に向かった。

しかし、谷口と同じような雰囲気の奴を知っているような感じがするが、気のせいだろう。

キョンは結構嫌な顔をしているな……

そして、涼宮は、
『ごめん、先にいっといて～』
と言ってどっかに走って行った。

ん？足元に空き缶だと？
見つけた以上は転ばないぞ。

～第三者視点～
上条は、空き缶を拾って満足そうな顔をしていた。

しかし、そこに野球ボールがちょうど空いていた窓から入り、上条の頭に吸い込まれるように当たろうとしたとき、上条は、とっさにしゃがんで、ボールを回避した。
だが、ボールは、無情にも上条の顔に当たろうとした。
しかし、それを上条は、体をひねって回避した。

だが、そこに走って来た生徒の上靴の爪先が上条の顔面、しかも鼻にテクニカルヒットした。

～キョンside～

それは、まるで一瞬だった。

上条は、野球ボールまでは、幸先良かったのだが、最後の蹴りまでは、回避出来なかったみたいだな。

しかも、止めと言わんばかりに仰向けで倒れた上条の腹が思いっきり踏まれていたぞ……

しかも、その生徒、顔が青ざめて更に、逃げていったぞ……

上条は気絶しているし……

しょうがない保健室に運んでやるか。

その後、上条を運んだあと文芸部室に向かった。

中に入ると長門が椅子に座って本を読んでいた。

「よ、長門。」

「（キョンに視線を向けてすぐに本に目線を戻す）」

なんか考えている事が分かんないな。

そして、そこらへんにあった椅子に座ろうとしたとき、いきなりドアが開かれた。

「ＨＥＹ　ＹＥＡＲ！！」ドッカーン

ってかハルヒ、そんなに勢いよくドアを開いたらドアが壊れるぞ……

「いや～遅れてごめんね～ちょっとこの子捕まえるのに時間がかかってね～」

ハルヒのドアを開けたのと反対の手には一人の女子の手が握られていた。

「あれ？上条君は？」

「あぁ、あいつなら今保健室で寝てるぞ。」

「なんで？」

そう聞いてきたハルヒに上条の不幸を話すと、だんだんハルヒの顔が青ざめて更に、引きつっていた。

もう一人の…あ、顔が見えた。

ものすごい可愛いな。

まぁ、その美少女は顔から血の気が引いて、更に、失神寸前だった。

「まぁ、こんなところだ。しばらく目を覚まさないと思うが。」

「そ、そう。」

長門は平然としているな……

「えっと、紹介するわ。二年生の朝比奈みくるちゃん……ってみくるちゃん？しっかりして！」

そうこうしている間に朝比奈さんが復活して、

「はっ、ここどこですか？なんで私ここにいるんですか？それになんでかか鍵をかけるんですか～？それに「だまりなさい。」ひっ」
「どっから拉致って来たんだ？」
「任意同行よ。場所は二年生の所から。」
「ってことは上級生じゃないか！」
「そうよ。」

お前は怖いもの無しだな。　ハルヒ

「で、朝比奈さんだったか。　部活動はどこに所属しているんですか？」
「えっと、書道部です。」
「ふーん。　じゃ、そこやめて。　みくるちゃん。　我が部の妨げになるから」
「おい、そんなにすっぱりと言うな。　朝比奈さんはどうなんですか？」

そう聞くとさっきまでぶつぶつと何か言っていた朝比奈さんが

「分かりました。　書道部はやめてこっちに入部します。」
「えっ？いいんですか？朝比奈さん。」
「はい。　そういえば、ここってなに部なんですか？」

そういえば、俺も知らない

「そういえば、ハルヒ。　ここっ「問題ないわ。　今考えたから」」

今考えたのかよ。

「で、なに部なんだ？」
「それは、」

「ＳＯＳ団よ！！！」

ＳＯＳ団と言うらしいなこの部活は。
っていうか部活なのに団かよ。

「で、ＳＯＳ団だっけか。　それはなんの略なんだ？」
「それはね、世「大方、『世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団』ってとこか？」そうよ。よくわかったわね上条く……へ？」
「って上条！？　いつからいたんだよ！！」
「あぁ、確か、『ここどこですか？』って所ぐらいかな。」

よく鍵をかけられる前に誰にも気付かれず入れたな。
ってか、復活早いなおい！

「次に必要な人材はどんな人だと思う？」
「へ？まだ集めるのか？」
「そうよ。ま、今日はこれまで。明日から毎日放課後にこの部室に集合ね。」

そういえば、俺と上条って手伝いだったよな……もういい考えないようにしよう。

～上条ｓｉｄｅ～

しかし、朝比奈さんだっけか。結構可愛いな。

まぁ、明日からにぎやかになりそうだな。

よし、帰るか。

～長門・朝比奈の会話～

「長門さん。一体何者なんですか？あの上条君？という人は。あの人がＳＯＳ団に入るなんて既定事項は、ありません。」

「今分かることは彼は異世界人。そして、全ての異能の力、神の奇跡さえも打ち消す事のできる幻想殺し。」

「なら、なんで幻想殺しがこんなところに。」

「これは推測だが、ある一定の力量以上の異能の力は打ち消す事が出来ないと思われる。それゆえに押し負けてこっちの世界に来てしまったものと思われる。」

「そうですが。ありがとうございます。古泉君にも連絡をお願いします。」

「了解した。」

第５話　朝比奈みくる登場、ＳＯＳ団結成（後書き）

次はなんとか古泉を出そうと思います。

第6話　古泉登場（前書き）

古泉登場まで一気にいきます。

第６話　古泉登場

～キョンｓｉｄｅ～
ＳＯＳ団が結成されてから数日たった。
俺は、いつものとうり、放課後に文芸部室改めＳＯＳ団室に居た。
そして、ハルヒはいきなりこんな事をいいだしやがった。
「パソコンも欲しいわね。」
「は？」
「こんな情報化社会にパソコン一つも無いなんて許しがたい事だわ。」
別にいいだろパソコンぐらい。
「じゃ、調達しに行くわよ。」
「おい、涼宮。俺らにそんなパソコン一つ買えるような金は無いぞ。」
「その心配は無いわ。考えがあるもの。」
考えがあるってハルヒ。ここはコンピ研だぞ。
って、涼宮！入るのかよ！
「こんにちは～！！パソコン一式貰いに来ました～！」
「なんなんだね！君達は！」
「ＳＯＳ団長から命令します。パソコン一式さっさと出しなさい。」
「おい、涼宮！それじゃあ脅「ちょっと黙ってて」くっ」

上条、ハルヒには何を言っても無駄みたいだぞ。

「そうね～。これ頂戴。」

「何を言う！それは今年部員から費用を出しあって買ったパソコンだぞ！そう簡単に！」

横で上条は歯を食い縛り拳を震わせていた。

「じゃあこっちにも考えがあるわ。」

そういってハルヒはコンピ研の部長の手をとりゆっくりと朝比奈さんの胸に。

「おい、待てよ涼宮。」

～上条ｓｉｄｅ～

気がついたら俺は、涼宮の手を掴んでいた。

「何よ。邪魔しないで。」

「お前、一体何をしようとしているんだ。」

「いいから手を「なにをしようとしているんだってきいているんだ、涼宮！！！」っ！」

俺は、感情のままに叫んでいた。

俺は人に対してこんなにも叫んだ事がないのにどこかで叫んでいたような気がする。

「何って見ればわかるでしょ。作戦よ。作戦。」

「どういう作戦なんだ。」

「そんなのあんたに関係ないでしょ。いいから手を「だから、どう

いう作戦なんだ！！言ってみろ！！」
「うっ、見ればわかるでしょ。みくるちゃんを使って脅迫しようとしているのよ！」
そう言ってハルヒはコンピ研の部長の手と俺の手を一気に振り払いながらそう言った。
やっぱりな。そういう事か。
「すまないな、部長さん。このとうりだ、涼宮のやったことを許してくれ。」
そう言って俺は頭を下げた。
「分かった。君に免じて許そう。」
「ありがとう。　所で頼みがあるんだが。」
「ちょっと待ちなさいよ、上条君！何かってにそんなことを「少し、黙っとけ！」ひっ」
「で、その頼み事とはなんだ？」
「一番古いのでいい。パソコンを一台譲って、いや、貸してくれないか？」
「……わかった。一番古くて余っているパソコンを貸してやる。」
「ありがとう。すまないな。こんな無茶なたのみ事聞いてもらって。」
「余っているしな、使い道がないし。」
「じゃあ、借りるぞ。」
そう言って俺は、パソコン一式を今まで固まっていたキョンと一緒に運んでセッティングし始めた。

～キョンｓｉｄｅ～

俺は、上条の気迫におされて固まっていた。

そして、セッティングしている時にハルヒが

「ちょっと、上条君！」

「なんだ？涼宮。」

「なんで邪魔したのよ！」

「朝比奈さんに恥をかかせるわけにはいかないからな。」

「別にいいじゃない！胸を触らせる位！」

「じゃあ、お前はどうなんだ？」

いきなり上条の目は、鋭くなった。

「どうって何がよ！」

「胸を触らせる事だよ。」

「え？」

「お前は別に胸を触られて良いのかよ。」

上条、男が胸、胸と連呼するのはちょっと……

「嫌に決まってるでしょ！」

「じゃあ朝比奈さんは良いのか？」

「うっ……」

「そういうことだ。今度からはもうちょっと他人の事を考えな。」

「……」

「今回の事はちゃんと反省しろ。」

「分かったわ……」

「じゃあこっち手伝ってくれ。あと朝比奈さんには後で謝っておけ

よ。」

まさかハルヒを説教するとは……

朝比奈さんは驚きの表情をしているし、長門は本から目を反らして目を見開いてこっちを見ている。

ある意味凄いな、上条。

～？？？？ｓｉｄｅ～

閉鎖空間が出現したのにすぐに消えた？

どういう事でしょうか。

このまま閉鎖空間が出現しなければこちらの方も助かるんですけどね。

それに、そろそろ頃合いでしょうか。

長門さんにも連絡をしておきましょう。

～上条ｓｉｄｅ～

俺は、次の日もＳＯＳ団室に来ていた。

なんせ、

『上条君とキョン、あんた達でＨＰ作っておいて。』

とか言ってきてな、只今キョンと一緒にコンピ研に頼みに行ってなんとか数分で完成させる事が出来た。

そして、まったりとしていると、朝比奈さんがお茶を出してきた。

「上条君、どうぞ。キョン君も。」
「あ、朝比奈さん。ありがとうございます。」
「あ、すみません。朝比奈さん」
「いえいえ。」

あぁ、上手いな～このお茶
などと和んでいると、
「ＨＥＹ　ＹＥＡＲ！！」ドッカーン
涼宮、ドア壊れるぞ。
「見て見て～チラシ作ってきたの。」
と、涼宮は紙袋を持って来た。
「本当はね、みくるちゃんとバニーの格好でビラ配りしたいんだけどね。それだと、なんか教師に捕まりそうだし、みくるちゃんも嫌がると思うから。」
ちゃんと人の事も考えるようになったな。
「みくるちゃん。ちょっとビラ配るの手伝って。」
「はい、わかりました。」
「上条君とキョンと有希は此処でビラ配り終わるの待っていて。」
そう言って涼宮と朝比奈さんは出ていった。
～キョンｓｉｄｅ～

さて、暫く暇だし何していようか。

「あ、そういえば転校生がくるって知っているか？」
「いや、知らんな。」
「もう少したったら来るみたいなんだ。」

上条はなんでそんなこと知っているんだ？

「どこでそんな情報を聞きつけたんだ？」
「職員室で先生が話しているのを聞いたんだ。」
「こんな時期にか。」
「そうみたいだな。」

ハルヒには教えないでおこう。
聞いた瞬間、
『その人が来たらすぐに勧誘しましょ！こんな時期に転校してくるなんて不思議だわ！』
とか言いそうだしな。

「あ～なんでよ～！！」ドッカーン

お、ハルヒが帰って来たぞ。

「なんで一人も貰ってくれないのよ！」

どうやらビラ配りは失敗だったらしい。

「あ～もう今日は解散！！また明日ね。」

そう言ってハルヒは帰っていった。

さて、俺も帰るとするか。

～長門と朝比奈の会話～

「朝比奈みくる、話がある。」

「はい、なんでしょうか。」

「明日辺りに古泉一樹がこっちに転校してくる。」

「そうですか。そういえばそろそろそんな時期でしたね。他に何かありますか？」

「これだけ。」

「はい、わかりました。それではまた明日。」

「そう。」

～古泉ｓｉｄｅ～

さて、明日から北高校ですか。

さぁ、明日の準備をするとしますか。

～上条ｓｉｄｅ～

次の日、俺は朝から通学路を全力疾走していた。

理由は簡単、野良犬の尻尾をふんで追いかけられているからだ。

だが、そのお陰で学校にもいつもより早く着いた。

「ハァ、ハァ、疲れた。」ガラガラ

「あ、上条君。おはよ。」

「あぁ、おはよう。」

「そういえば、今日転校生が来るって知っている？」

「そうなのか？俺が聞いた話ではもう少し先とか聞いたが。」

「私もそう思っていたけどなんか、職員室の前に行ってみたら今日、

九組に来るらしいわよ。」
結構俺が聞いた話よりは、早かったな。
「へ～。　あ、涼宮。」
「何？」
「九組に押し掛けて転校生を無理矢理連れてくるなよ？」
「うん、だけど勧誘はするわよ？」
「まぁ、ほどほどにしておけよ？」
「分かったわ。……説教怖いもの。」
最後らへんがよく聞こえなかったけどそこは、聞かないでおこう。
そうこうしている内にキョンが入ってきた。
今日は谷口と一緒に登校か。
おっと、そろそろホームルームか。
席に着こう。
～古泉ｓｉｄｅ～
ホームルームが始まって僕は教室に入って自己紹介をした。
「どうも、今日からこの学校に転校してきました、古泉一樹です。
これから三年間、よろしくお願いします。」
自己紹介が終わって、僕は先生に指定された席に着いた。
そして、一時間目の授業が終わって、九組にあの人がやって来た。
「すみません、此処のクラスの転校生呼んでくれますか？」

さて、呼ばれた事ですし、会いにいきますか。

「はい、転校生は僕ですがどうかしましたか？」

「あ、あなた？ねえねえ、あなたＳＯＳ団に入ってみない？」

「ＳＯＳ団…ですか？」

「そうよ。ついでに言うと私が団長の涼宮ハルヒよ。」

この人が涼宮さんですか。

「そうですね、考えておきましょう。」

「じゃあ、無理にとは言わないわ。少しでも興味があったら放課後、文芸部室に来て。」

「文芸部室ですか。はい、わかりました。では、そろそろ授業が始まりますので僕は、この辺で失礼させていただきます。」

「じゃあ待ってるからね。」

確か、涼宮さんは他人よりも自分の事を優先的に考える人と報告ではありましたが、可笑しいですね。

他人の事も考えるなんて。

放課後、長門さん辺りに聞いてみましょうか。

～キョンｓｉｄｅ～

時間は飛び、放課後。

俺と上条は何時ものようにＳＯＳ団室に居た。

そこにハルヒが少し遅れて入ってきた。

一人知らない男子生徒と一緒に。

「ＨＥＹ　ＹＥＡＲ！！」ドッカーン　バキ

何か壊れた音がしたが気のせいだろう。

「おい、涼宮。無理矢理連れてきたんじゃないよな？」

「当たり前じゃない。途中で会ったのよ。　じゃ、自己紹介をお願い。」

「どうも、今日転校してきました古泉一樹です。今後ともよろしくお願いします。」

結構整った顔しているな。

「俺は、上条当麻。よろしく、古泉だっけか。」

「朝比奈みくるです。」

「…長門有希。」

「俺は、「こいつはキョンよ！」……」

なぁ、作者。なんで俺の自己紹介はいつも本名がでてこないんだ？（泣）

「なかなか面白そうな部活ですね。……決めました。僕はこの部活に入部することにします。」

まじかよ。

他にも部活があるのにか？

まぁ、本人が入ると言っているんだからそこは何も言わないでおこう。

「そういえば、疑問に思ったんだが。」
と、上条。
「何？上条君？」
「ＳＯＳ団って何をする部活だったっけ。」
そういえば俺もまだ聞いてないな。
というか結成から色々とドタバタしていたからな。
聞く暇が無かったな。今考えると
「そういえば言ってなかったわね。あ、もう古泉君には来る途中で言ってあるから。」
ハルヒ自身も忘れていたらしい。
「この部活の目的はね、」
大きく息を吸ってから、
「宇宙人や未来人や超能力者を探しだして一緒に遊ぶ事よ！！」
そんな目的があったのか。
この団は。
「なるほど、涼宮らしいな。」
「あ、後一つ提案があるんだけど良いかしら？」

そう言ってハルヒは、ホワイトボードに何かを書き初めた。

「今度から市内不思議探索っていうのを月に何回かやりたいんだけど、どうかしら？」

「おっと、ハルヒ。それは大体月に何回位だ？」

「そうね、本当は毎週やりたいけど皆の都合とか色々とあると思うから、月に二回位ね。」

まぁ、それぐらいが妥当だろう。

毎週休日を返上するなんて真っ平御免だな。

「不思議探索する日は此処で連絡して、皆に用事とか都合を聞くわ。それで皆暇なときに不思議探索をする。　これでどう？」

「まぁ、それぐらいだったら良いだろ。　な、キョン。」

「それぐらいだったら良いな。」

ハルヒも人の事を考えるようになったな。

「古泉君達は？」

「僕達は構いませんよ。」

「そう、じゃあ決定ね。明日の金曜日に一応予定は教えておくわ。それじゃあ解散。」

さて、帰るとするか。

俺と上条が鞄を持って団室から出ようとすると、後ろから声をかけられた。

「まって。二人とも。」

「なんだ？長門？」
「これを家に帰ったら読んで。」
そう言って長門は分厚いハードカバーを渡してきた。
上条も同じような物を持っている。
俺の本は『ハイペリオン』上条のは『哲学者の密室』だった。
「今日、帰ったらすぐに読んで。」
「明日じゃ駄目なのか？」
「駄目。今日帰ったら。すぐに」
「わかった。帰ったらすぐに読むよ。」
そう言って俺達は下校した。
～長門、朝比奈、古泉の会話～
「長門さん、朝比奈さん、質問があります。」
「なに？」
「彼、上条当麻は一体どんな人なのですか？」
「彼は、「上条君はいい人ですよ。」」
「どんな風にですか？」
「上条君はパソコンを貰いに行ったとき、私が胸を触られるという時に彼が止めて、あの涼宮さんに説教を」
「！！もしかして、あのときの閉鎖空間は」
「そう。彼が説教したときに出来たもの。」
「では、消滅したのは、」
「彼の説教が涼宮ハルヒの心に響いて納得したため消滅したのだと思われる。」
「そうですか。最後に、上条さんは異世界の記憶はあるのですか？」

「記憶はない。」
「はい。わかりました。それにしても、涼宮さんを説教するなんて、よっぽどのお人好しではないと無理ですよ。」
「はい。それに……かっこいいですし……」

朝比奈は顔を真っ赤にしながら言った。
しかし、最後の部分は声が小さくて二人の耳には届かなかった。

「今日私から全てを話す。異世界の事も、インターフェイスだということも。」
「はい。わかりました。」
「わかりました。では、私は帰りますね。」
「では、僕も。」
「それでは、また明日。」

「上条当麻、ですか。結構あなどれませんね。」

第6話　古泉登場（後書き）

今回は長かったですが、どうでしたでしょうか。
少し、無茶をして、パソコン強奪、古泉登場を早めました。
いよいよ次回、上条の記憶が……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9667z/

上条当麻in涼宮ハルヒの憂鬱

2012年1月6日01時47分発行